令和６年度

大阪大学
総合型選抜・学校推薦型選抜
解答例又は出題の意図

小論文（外国語学部）

問一　出題意図

文章の論点、論理展開についての理解力を、読み取りが正しく応用できているかという点からはかり、同時に作文を通して、論理一貫性、構成力、客観的根拠提示の妥当性についてチェックする。地域研究を志す者として、他者を、社会をどのようにとらえようとしているのか、問題意識や洞察力についても見るべきものがあれば評価したい。

問二

［課題文］

ヴィスワヴァ・シンボルスカ著（1997）『終わりと始まり』（沼野充義訳）未知谷

［出題意図］

学びをつうじて獲得した知識に安住しないことの意義を課題文の正確な読解によって理解したうえで、それを自分自身の問題として想像する応用力と説明の力を問う。

［出題］

（一）傍線部に、「本物の詩人」とあるが、この文章の著者は「本物の詩人」をどのような詩人であると考えているか。文章全体の内容を踏まえて、一〇〇字程度で縦書きで説明しなさい。

（二）「わたしは知らない」という言葉が、あなた自身の今後の学びのなかで持つことになるかもしれない重要性について、四〇〇字程度で縦書きで自由に書きなさい。

［解答例］

（一）詩を書くことで到達した「知っている」状態に満足せず、新たに湧き出した疑問に導かれ、過去の達成を乗り越えてもう一度、さらにもう一度と詩作を続けることで、自分の生を拡張し、作品に永遠の生命を与えることのできる詩人。（105 字）

（二）の解答例はありません。

問三

人口わずか二百万人の仮想の国「オーサカ」の詩人 A と詩人 B の詩作に関する主張を、それぞれ三百字程度で創作しなさい。なお、A 氏は母語「オーサカ語」での詩作にこだわり、B 氏は移住先の大言語である日本語で創作しています。また、「オーサカ語」は日本語とは意思疎通ができない全く違う言語と仮定します。

出典：多和田葉子著『エクソフォニー　母語の外へ出る旅』岩波書店　2003 年より「ワイマール　大きな言語、小さな言語」から

【出題の意図】

問題文の中で言及されているナイジェリア出身の英語で作品を書く亡命作家をめぐる議論を中心に整理し、母語である小言語でなく英語で創作活動することについて、①肯定する意見と反対する意見の論点を本文から取り出し、②翻って仮想の小国「オーサカ」の詩人 A と詩人 B の主張に当てはめて論じる。また、これに必要に応じ、独自の視点や考え方を適正に加えて議論を展開させる。